学生大使　実施報告書

氏名：吉田 真琴
学部・学科（コース）・学年：
人文社会科学部人文社会科学科グローバル・スタディーズコース１年
派遣先大学：ベトナム国家農業大学
派遣期間：令和６年２月２１日～令和６年３月６日

１　日本語教室での活動内容

日本語教室での活動は、私が出発前に必要だと考え準備したものとは全く異なっていた。私は日本語のあいうえお表などといった文字の学習や、簡単なあいさつを学習するのだと考えていたが、現地学生は私たちを空港で迎えてくださったときから「ベトナムへ来てくれてありがとう」とあいさつをし、私たち日本人に年齢や名前を聞いてくれた。

最初の日本語教室でも、「何を勉強したいですか。」と尋ねると、「日本語を使って会話がしたい。」と初めて会う人と会話をするのと変わらず、日本語を使った会話練習を行った。

また別の日は、日本語のＮ１の試験を受ける予定があるため内容を見てほしいといったものだった。Ｎ１の問題は日本人の私ですら解くことが難しく、感覚的に答えがわかるもののなぜその答えではないのかを説明することが大変難しかった。自分の非力さを実感するものだった。

２　日本語教室以外での交流活動

日本語教室以外でも現地学生はできるだけ私たちが満喫できるように様々な場所に連れて行ってくださった。現地学生にも現地学生の生活や授業があるのにも関わらず、毎朝８時という早い時間から私たちを迎えに来て、朝ご飯を食べその後の活動まで案内してくださった。さらに夜も遅い日は１１時近くまで、私たちと時間を過ごすこともあった。この２週間は普段とは違った生活で、私たち以上につかれていたのではないかと容易に想像がつく。またそれと同時に、そのような様子をあまり見せず様々な場所を案内してくださった皆様には頭が上がらない。

３　参加目標への達成度と努力した内容

私の今回のプログラムでの目標は「積極的な行動」たったこれだけだった。以前別の国に行ったときに、自分の消極性を日本に帰国するときに実感しひどく後悔した。その経験から私は今回のプログラムでは積極的に現地の人と交流し、お互いにとって良い経験だったといえるような活動にしたかった。そこで私が特に注意して行ったことが３つある。

１つ目はSNSの交換だ。ベトナムでよく使われているのはFacebookであったが、おなじようにInstagramも使われていたため、Instagramでの交流を主として行った。SNSの交換のよい点は、相手が日本の文化のどのような点に興味を持っているかを知ることができることだ。

アニメが好きなのか、言語そのものへの関心があるのかなどを知ることができる。

２つ目は名前を覚えることだ。これは１つ目の SNS での交流に通ずるところがある。ベトナム語の名前の発音は、一度で聞き取ることは基本的にはできないと感じた。そこで SNS を交換することで相手の名前の綴りを知ることができる。名前を覚えるということはコミュニケーションの第一歩であり、相手の信頼や相手をリスペクトする気持ちにもつながる常陽な点であると考えている。

３つ目はベトナム語への興味を積極的に示すことだ。誰でも自分の文化に興味を持たれることはうれしく感じる。もちろんそれは国に限られることではない。そこで日本語で何というのか聞かれたものに関しては、私もベトナム語ではどのように言うのかを訪ねるなどして、話題にし、対話を広げていった。

この３つのことを意識し、現地の方と交流することができたことで帰国した今でも SNS を通じて日本語での交流が続いている。２週間で終わってしまう関係ではなくその後も続く友好関係が築けたことを非常にうれしく感じている。

４　プログラムに参加した感想

初日、ホテルに到着したとき実際に思ったことは、２週間しっかりやっていけるのだろうかという不安だった。衛生観念の違いはきれいごとでかたづけられないほど明白であったと思う。２日目の朝食で食べに行ったフォーのお店では、木製の箸がおいてあったがかなり使うのに勇気がいる見た目をしていた。しかし、その不安とは裏腹に私たちの体は慣れるもので、３日もたてばあまり気にならなくなった。

今回のプログラムに参加し大きく変わったと感じるのは、同じ人種でも感じ方が大きく異なるということだ。多様性が声高に叫ばれる現代で私は、日本以外の国のこととなぜか物事を国単位で考えてしまっていた。しかし、このプログラムに参加し共にベトナムに渡った日本人の中でも大きな環境の変化に対し感じることが全く異なっているという当たり前のことに改めて、気が付くことができた。また、物質的な豊かさと心の豊かさは全く関係のないことだということもわかった。私たちは日本に生まれただけで、確かに様々な点で恵まれているかもしれないが、それを理由に他者に対して優位に立っていると考えてはいけないと感じた。

５　今回の経験を踏まえた今後の展望

国単位で多様性を考えるという間違いに今回のプログラムを通じて再認識することができた。そのため今後は様々な場面で聞く多様性という言葉の意味をより深く感じることができると考えている。また私自身がその言葉を使う際もより意味を咀嚼し慎重に使うようにしたい。

この経験を通じて、より東南アジア諸国に対する関心が増したため、今後の山形大学の講義はそれに関連したものを履修したいと考えている。入学当初から希望していた科目の履修はもちろん、多様性に関連したものにも興味を持っていきたい。

6　現地での活動写真

現地大学近くの街並み
日本語教室での様子

【学生大使 実施報告書】

アオザイ体験
陶芸村での集合写真